人をつなぐもの

先日、小春会、竹村会が開催された。
私のカレンダーの中には、学徒大会が５月、関東と OB 総会６月、インターハイ８月、新人９月、１１月小春会・・・という具合にスケジュールが並んでいて、これで１年が繰り返す。
特に歳を重ねてからは早いもので、このサイクルがドンドン回転する。

創立１００周年創部８０周年のときに小原先生に還暦祝いを贈呈したと思ったら、もう７０歳になられる。
関根御大に至っては９２歳だ。
自分ももう若いとはいえないが、いまだに「若手 OB」である。この偉大なる恩師たちが君臨する限り、われわれは「若手」でいいのだと思う。

★岐阜インターハイから９年・・・・

竹村さんが監督着任は私が卒業した１９８５年。
工藤さんは最強の中長距離時代を作り、いまだその時代の春高記録は破られない。
バトンタッチされた高野さんが、
熊谷太郎らを配し関東の１６００mR で勝ったのが１９９６年。
その高野さんが最後に臨んだインターハイが２０００年の岐阜である。高校５３回。
その年、徳永剛は４００ｍで４９秒０１という好記録をマークし、安田、斉藤のインターハイ棒高ダブル出場。斉藤達也は６位入賞。
４ｍ９０を一回で跳んだのに６位という、史上最高レベルのインターハイであった。

まさに国内の高校生のスポーツが最高に盛り上がっていた１５年間。

「団塊 Jr」の高校時代だったのだ。

高校は増設され、競技人口はうなぎのぼりに増えた。
競争率の増加は「史上最強の県大会」の時代をむかえた。
２００ｍでは２１秒９でも６位に入れなかった。マイルも３分２０秒を切るのは必定とされた時代。１９９６年の熊谷太郎らのマイルは「３分１７秒８で県４位通過！」・・・という恐ろしいレベル。
「埼玉を抜ければ関東は大丈夫」とまでいわれた時期であった。

いま東部大会、県大会、あるいは有名強豪高校の大会記録、学校記録をみると、のきなみこの時代に記録が生まれている。

・・・・その後、学生人口は減ったものの、トレーニング理論の確立により、上位者は依然としてハイレベルを維持し、「王国埼玉」の牙城は崩していない。

この５年間の埼玉は強い。男女とも中学、高校でほとんどの種目で全国入賞、あるいは優勝者を輩出しているという活躍ぶり。指導者、そして陸上協会がいかに頑張っているかという証であろう。我々としても誇らしい。

★同じ夢を抱いて

下の写真は２００５年千葉インターハイのときのもの。
５３回徳永と塚本が応援に来てくれた。４００mR の決勝での春高を見て感激したという。みな一生忘れられない光景だった。

そして今年の再会。４年経って、二人とも立派な社会人に

塚本は２年の春（１９９９）に４００ｍで県７位になるも関東を逃す。
この悔しさをバネに短距離陣が奮起。塚本は故障に苦しみながらも同期の徳永とリレーで関東出場を決めた。そして翌年も継続してリレーは関東へ

２０００年　学校総合県大会（５月１４～１６日：上尾）

４００ｍ	４位	４９”０３	徳永剛
４００ｍＲ	４位	４３”５０	高橋礼　・霜越　・山田　・徳永
１６００ｍＲ	６位	３’２０”４６	佐藤　・徳永　・高橋礼　・塚本
棒高跳	２位	４ｍ８０ （春高タイ）	斉藤達哉
	５位	４ｍ５０	安田博幸
円盤投	４位	４３ｍ２８	大山雄也
総合	５位		

★徳永の成長

４９秒０で走り、個人４００ｍで全国出場を果たした徳永も中学時代、決してエースであったわけではないらしい。転居した白岡町篠津中学には陸上部が存在せず、４００ｍで試合にでたのは一度だけ。陸上部はないが、出場させてあげようという教員の計らいであった。

春高進学した徳永は、これまた陸上部にすぐ入るわけでもなかった。サッカーなどは、細身の彼には当たりがきついため、やはり陸上部に入部。
そこで彼は大きく意識が変わる。勉強も運動もしっかりやっているチームメイトに影響され、スプリンターとしての才能を開花させていく。
上級生は見事に４００ｍR でインターハイ（岩手）出場を決めた秀逸な先輩たち。同期にはすでに４００ｍで県の決勝を走っている塚本、棒高全中入賞の斉藤、走っても投げても跳んでも万能の霜越・・・岐阜インターハイには大人数で乗り込もう！という奮起した時代であった。

とはいえ、徳永も５０秒を切れるほどになろうとは思っていなかったという。
しかし、高校２年の御宿合宿で彼は変わった。

練習中に高野監督が言った。
「徳永、東大はいつでも受けられるが、インターハイは人生で一度しか行けないぞ！」・・・

この師の言葉に徳永はインスパイアされた。

死に物狂いの冬季練習が功を奏し、春にはその才能は爆発。
４９秒０３で県大会４位、関東５位と躍進。
見事に岐阜総体出場選手となった。
短距離個人種目でインターハイ出場は稀な栄誉だ。竹村～高野時代の１５年で、たった４人しかいない。
１００m陸名英二、４００m塩川茂樹、熊谷太郎、徳永　剛である。

徳永はその後も横国大でさらに成長。春高の合宿にも参加し、大塚さんにもスプリントの教えを受け、当時春高生の奥岡や後藤らと練習を積む。
関東インカレでも入賞し、２００５年、埼玉選手権で４００m４７秒５８という記録で優勝までしてみせた。
これはいまだに横浜国立大学記録として輝き続けるもの。

徳永いわく、「春高での陸上は楽しかったです。良い仲間がいて、OB もそっと支えてくれていて・・・」

この言葉に春高陸上部の全てが集約されているような気がする。

★リスペクトする気持ち

運動部の OB 会といっても様々だ。一般には機械的に名簿で統治し、連絡を募る同窓会のような活動が大半。あるいは指導者で完全に区切られて独立しているものがやっとだろう。

出席率を上げるのは、「上下関係で縛る」のが世では最も一般的。先輩後輩軋轢でトップダウン方式命令を到達するわけだ。

しかし上下的軋轢では、会社組織と同じで、感情を省いた「仕事」でしかない。
中には４０歳代、５０歳代になっても学年が上の先輩にビクビクしながら OB 会を開いている高校もあるそうだ・・・。
だが、組織、形態を作っていかねばならないとしたら、そういう手法も仕方なかろう・・・という事も、私の歳になればよくわかる。

・・・しかしそれでは楽しくはないだろう・・・

春高陸上部は厳しい上下関係での統率は選ばなかった。
じゃあ　なぜみんな OB 会に来てくれるんだろう・・・？

私はこの OB ホームページを書いて１０年、自信をもって断言できる。

春高陸上部９０年の途切れない意志。その根源は「リスペクト」である。
恩師を、母校陸上部を、先輩後輩を「敬愛」する気持ちが人の心をつなぐのだと思う。

私は、社会人的にも競技的にも「先輩たち」はすごいと思っているし、かっこいいと思う気持ちは高校時代から変わらない。
それがこのコラムの始まりでもある。同時に後輩諸君にも敬意を持っている。
インターハイで勝つときに盛り上がるのも分かる。
しかし、みかえりでなく、敬意を持った関係は、勝敗に左右されない。
後輩たちが勉強も運動も一生懸命やってるな・・・と分かれば、OB として応援しようか・・気持ちになるというものが男心だと思う。

私は２月の幸風会で感銘を受け、この一週間で小春会、竹村会に参加してそれを再確認した。

人の心が自然に集まる会・・・恩師・先輩方は素晴らしいクラブを作ってくださったものだ。お金では買えない財産である。

エレベーターでのスナップ。（いやあ・・・いつ見ても徳永はいい男だな・・・）
１６歳も離れていて、このベタベタぶりは春高ならではの素晴らしい光景。

勘違いしないで頂きたいが、これは徳永を怪しい雑居ビルの飲み屋に誘っているのではない。

彼の実家と我が家は、居住マンションが同じなのだ。

３７回　のもと歯科